

【一般演題3】 第12席 「江戸期にみられる三焦論について－『黄扁性理真誥』を通じて－」

京都 中川 俊之

三焦は中国伝統医学の理論のうち、過去から現在に至るまで、常に論点となる“場”である。現在までの三焦に関する研究態度は、医書中（特に医経）の経文・注釈を巧みに解釈することによって、あるいは中国思想（哲学）からのアプローチによって、その全体像を定義するという方法が一般的である。あるいは伝統医学の科学化・客観化という文脈において、このような研究成果を不毛な論議の追加事項と見做し、実態的・現象的に三焦を把握し直すという方法もある。しかし、現在の我々の中国伝統医学観に影響を与え続ける江戸期医学における三焦の研究成果は、総括されないまま埋もれているのが現状である。よって演者は江戸期にみられる三焦論について比較学説史（学説変遷史）的な立場から検討を試みることにする。

江戸前中期の医学の主流は、曲直瀬道三とその学統を中心とする所謂後世方派であり、当時も三焦は論点であった。それは当然のことで、新渡来の金元明医学の問題点（矛盾点）をそのまま引き継ぐ結果となったからである。後世方派内部の三焦に関する研究の一つは、曲直瀬道三→曲直瀬玄朔→饗庭東庵→初代・味岡三伯→岡本一抱に至る間に、三蔵学説として結実し一応の解決を見る。その成果の全貌は岡本一抱『医学三蔵弁解』（1700）に収録されている。つまり三蔵学説という結論に至る過程が把握できれば、江戸期における中国伝統医学の受容態度が窺え、上記の目的の一つが果たせると考える。

そこで、本演題では、その理論展開を如実に示す二代目・味岡三伯『黄扁性理真誥』（1703）を中心に、雲庵『医学授幼鈔』（未詳）、草刈三越『医教正意』（1678）、浅井周伯『内経病機撮要』（1697）等を交えて解析し、饗庭・味岡系の三焦論を提示する。そして古方派の嚆矢とされる名古屋玄医の『三焦心包絡命門弁』と比較することによって、江戸期にみられる三焦論をより立体的に考察していく。